

こういうさわやかなところでのアルバイトも悪くないな……。

……ガチャーン

後ろから激しい金属音が聞こえる。

「うぐう……」

「ああ、これだけでもう、何があつたのか想像できた。」

振り返ると案の定、あゆがカウンターの隅にかためて置いてあつた手拭用のティッシュ台をまとめて床に落としていた。おそらく、カウンターを拭こうとして気づかなかつたんだろう。

「……どうしてそんな真似が出来るんだ。」

「何やつてんだあゆ」

俺はおろおろと立ち尽くすあゆに台を拾うように促し、自分も拾つてやつた。

「うぐう……」

あゆが台を拾つてカウンターに戻す。

「おい、その『うぐう』っていうのは、バイト中はやめろよ。お前、客相手なんだしな」

「うぐう……分かつたよ」

全ての台を上にあげると、あゆはおとなしく拭き掃除に戻つた。

俺は注意した途端にうぐうを使つたあゆに何か言おうと思つたが、バイト中に俺はあゆを見る。じつと興味深そうに

あまり遊んではいられないで掃除に戻る。全く、先が思いやられる。

※

掃除の後、俺とあゆは控え室に戻り、店長の説明を聞く。

「さて、職種の件だけど、相沢君にはメイキング、つまり裏でハンバーガーなどを作る仕事を、月宮さんにはコミュニケーションタフマリ、お客様の注文を聞く仕事をしてもらう」

「はい」

俺は答える。まあ、予想通りだな。

「でも、これはあくまでもメインの仕事と考へて欲しいんだ。人手によつては入れ替わつたりしてもらう事も出てくると思う」

「はあ……」

料理を作るあゆ、営業スマイルで客前に立つ俺、どつちも想像がつかない。

「だから全てのマニュアルを覚えておい

て欲しいんだよ。まあ慣れないいうちは自分の職種だけいいんだけど、一応全部

説明しておこう。まずはコミュニケータから……」

俺は店長の話を止めた。

「ナトリウムがどうとか言われても俺

ちには分からぬいんですけど……」

俺はあゆの方を見る。あゆは分からぬことすら分かつてゐなかつた。

「ああ、そうか。君たちは高校生だつた

店長の話を聞いている。

大丈夫だろうか？

「まず、言っておかなければならないことは、この店は確かにハンバーガーを売る店だけど、ハンバーガーは今や安すぎで儲けにはならないんだ。だから、付属のもので売り上げ稼いでいる。ドリンクとか、ポテトとかだね」

「そうなんですか？」

俺は元々知つてゐることではあるが、一応相槌をうつておいた。

「だから、ハンバーガーだけを頼んだお客様にはポテトやドリンクを勧めて欲しいんだ」

「わかりましたあ」

あゆが元気に返事をする。

「元々、ハンバーガーは水分を少なく作つてあるから飲み物は欲しくなるし、体内でナトリウム不足を起こすようになつてから手近な塩化ナトリウムを……」

「ちょ……ちょっと待つてください……」